

EDUCAUSEカンファレンスの魅力

Why Not Join the EDUCAUSE Conference?

三重大学情報基盤センター助教 白井 伸宙

Nobu C. Shirai, Assistant Professor, Center for Information Technologies and Networks, Mie University

ORCID ID : <https://orcid.org/0000-0001-7641-6190>

1. はじめに

筆者は 2024 年度の EDUCAUSE カンファレンス派遣事業（以下、派遣事業と略す）のうち、甲型の派遣団員として採用され、様々な活動に参加した。本稿では、EDUCAUSE カンファレンスの魅力を伝えることにより、より多くの人に興味を持ってもらうことを目指す。本稿の内容は奈良県コンベンションセンターで開催された AXIES 2024 年度年次大会（2024 年 12 月 10 ~ 12 日）において、国際連携室主催の企画セッション『EDUCAUSE 年次カンファレンス 2024 参加報告』で筆者が口頭で発表した内容をもとにしている^[1]。以下では筆者が考える EDUCAUSE カンファレンスの 3 つの魅力について、それぞれ説明する。

2. 【魅力1】ICTの最新トレンドを追える

2-1. 米国の ICT と EDUCAUSE

「米国が ICT（情報通信技術）の分野でトップを走っている」と書いて、否定する人は多くないだろう。影響力のある新しいサービスや製品の多くは米国の企業で生まれている。ICT の研究にも、巨額の資金を投じている。少なくとも現状では、ICT で世界に遅れを取らないようにするには、米国で起きている ICT の最新のトレンドを追わざるを得ない状況にある。

ICT の高等教育への応用についても、やはり米国が世界を牽引している。日本の高等教育機関と取り引きがある IT 企業の多くは、本社が米国にある。米国の高等教育機関の中には、これらの IT 企業と直接コラボレーションしながら教育への応用を図っているところまである。こうなってくると、「ICT で自分の組織を抜き出した存在にしたい」という気概だけあっても、気付かないうちに二番煎じになってしまう可能性がある。出し抜く必要がないという場合でも、既に取り組みが存在し、その成功例や課題が議論されているのであれば、その動向を踏まえた方がよりよく ICT を活用できるだろう。

「米国の高等教育機関で ICT がどのように活用されて

いるか」の動向を探るのにピッタリなのが、米国の非営利団体 EDUCAUSE が主催する年次カンファレンスだ。EDUCAUSE のビジョン(Vision)は以下の通りである。

EDUCAUSE is inspiring the transformation of higher education in service to a greater good.^[2]

筆者が訳すなら、「EDUCAUSE は世のため人のために高等教育の変革を促す」といったところだろうか。

EDUCAUSE は ICT やデータを戦略的に活用することで、高等教育の明日を切り開くことを使命としており、年次カンファレンスは、その活動の成果を発表する場となっている。EDUCAUSE の説明を読んで、「なんだか AXIES に似ているな」と思ったなら、その直感は正しい。

実際、AXIES は EDUCAUSE を手本にして作られた組織であり、「日本版 EDUCAUSE」を意識して組織されている。「AXIES があるから、わざわざ EDUCAUSE に行かなくても良いのでは？」と思うかもしれない。その通りである。日本に住んでいて日本の教育機関に勤めているのであれば、まずは AXIES への参加を検討すべきだ。しかし、EDUCAUSE の方が歴史が長く、規模が大きく、既に述べた通り、こと ICT に関しては、地の利がある。彼の地の最新の取り組みについて、誰かが日本に持ち帰らなければ、日本のコミュニティ全体が遅れをとってしまう可能性もある。必ずしも国を背負って行く必要はないだろうが、まだまだ EDUCAUSE から



図 1 EDUCAUSE 年次カンファレンスが開かれた都市を米国地図上に示した地図¹⁾。筆者が参加した 2024 年大会はテキサス州サン・アントニオ(San Antonio)で開催された。次回の 2025 年大会はテネシー州ナッシュビル(Nashville)で開催予定。

学ぶことは多い。

年次カンファレンスは1999年に始まり、米国各地で開催され、2024年に26回目を迎えた(図1)。途中、2020年は新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン開催となり、続く2021年はハイブリッドで対面とオンラインが同じ日程で開催された。その後、2022年以降は対面とは別日にオンラインの日程が用意されるようになった。

2-2. EDUCAUSE 年次カンファレンス 2024 (対面) in サン・アントニオ

2024年の年次カンファレンス(対面)は、テキサス州のサン・アントニオという都市で開催された。筆者がサン・アントニオに到着した日に食料を求めて市街を散策した際の動画記録を公開している^[4]。会場は、ヘンリー・B・ゴンザレス コンベンションセンターという巨大な国際会議場であった。会場の様子についても動画記録を公開している^[5]。対面の日程は10月21~24日で、初日の10月21日は追加料金が必要なプレカンファレンスセミナーと招待制のレセプションが開かれ、メインの活動は10月22~24日(Day 1~3)の日程で行われた。会場には延べ7,500人以上の参加者が集まった。Day1~3には、異なる部屋で同じ時間帯に並行して行われるブレイクアウトセッション、皆が巨大な部屋に集まって行われるジェネラルセッション、ポスターセッション、EDUCAUSE コモンズと呼ばれる企業展示が開かれた。EDUCAUSE コモンズを歩いて回りながら撮影した動画も公開している^[6]。

2-3. EDUCAUSE 年次カンファレンス 2024 (オンライン)

年次カンファレンス(オンライン)^[7]は11月13、14日の日程で行われた²⁾。年次カンファレンスへの登録は、登録時期や参加する活動、EDUCAUSEのメンバーか否かによって値段が異なるが、対面参加すればオンラインの参加権も付いてくる。また、オンラインのみのオプションもあり、こちらは現地に赴く必要がないため、より気軽に参加できる。まずはオンラインのみから参加してみるというのも一つの手だろう。オンラインは特設Webサイトを通じてオンラインセッションに参加できる。オンラインで配信されたセッションの多くは録画され、同じWebサイトで1ヶ月間視聴可能な期間が提供される。

2-4. 2024年のトレンド：生成AI

以下では年次カンファレンスで筆者の印象に残ったトピックを紹介する。まずは、ChatGPTなどの大規模言語モデル(Large Language Model; 以下、LLMと略

す)に代表される生成AI(Generative AI; GenAI)についてである。

2022年11月にOpenAIによるChatGPTがリリースされ、生成AIは研究者だけではなく一般の人の知るところとなった。筆者が生成AIに興味を持ったきっかけは、顧問をしている計算研究会という三重大学のサークルの学生からの紹介である。彼らの勧めもあり、2023年4月からChatGPTの有償プランであるChatGPT Plusを使用し始めた。筆者の主な用途は、シェルやPythonを使ったコマンドラインで動くプログラムの自動生成である³⁾。既出の図1や後出の図2もChatGPTを使用して作成したPythonのプログラムの出力をベースにしている。これらのプログラム生成を含め、他者にも役に立つと考えられるユースケースを貯めて共有する場として“GPTDialogues”というGitHub組織を作成し、プロンプト・出力とともに公開している^[9]。

2023年の年次カンファレンスでは、生成AIに関するセッションが増加し、筆者が参加した2024年の年次カンファレンスでも引き続き生成AIに関するセッションが多く見られた。図2に2014年以降の年次カンファレンスで指定したキーワードを含むセッションの数の推移を表す⁴⁾。2020年にピークを迎えた「デジタルトランスフォーメーション(Dx)」を含むセッション数が単調減少する中、2023年に現れた「生成AI(genAI)」を含むセッションが2年連続で増加している。これに呼応して、2020年でピークを迎え減少傾向だった「人工知能(AI)」を含むセッション数が、2023年でこれまでの最大値の2倍以上の数まで増え、2024年でも同じ傾きで増加している。世間と同様、2024年は高等教育のICTにおいても、人工知能が席卷した年だと言え

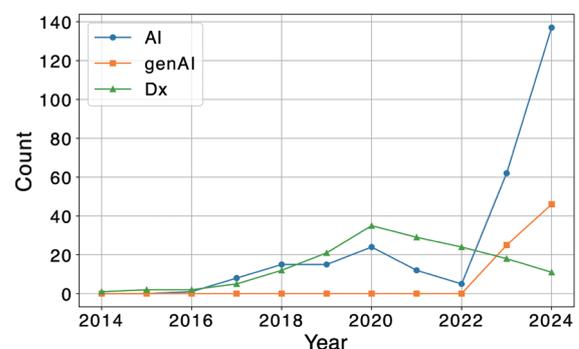


図2 特定のキーワードを含むセッション数の年次変化のグラフ。横軸は年次、縦軸はセッション数を示している。「AI」は 'artificial intelligence' もしくは 'AI', 「genAI」は 'generative artificial intelligence', 'generative AI', 'gen AI', 'genAI' のいずれか, 「Dx」は 'digital transformation' もしくは 'Dx' を検索ワードとしている。「genAI」は「AI」の部分集合になっていることに注意。

るだろう。かくいう筆者も、生成 AI の最新話題に触れることが EDUCAUSE 参加の 1 つの目的であった。

2-5. アリゾナ州立大学における生成 AI に関する取り組み

2024 年大会の特選セッションでは、生成 AI に関する講演が複数取り上げられた。そのうちの 1 つが、アリゾナ州立大学 (Arizona State University; 以下 ASU と略す) 副 CIO (Deputy CIO) の Kyle Bowen 氏による「AI と自分サイズのテクノロジーの未来 (AI and the Future of My-Sized Technology)」という講演^[11]であった。ここでは、Bowen 氏の講演に加えて ASU の AI 加速チーム (AI Acceleration team) を率いる Elizabeth Reilley 氏らによるブレイクアウトセッションのパネル討論^[12]の内容をまとめつつ、ASU の AI に関する取り組みを紹介する。

筆者が初めて ASU の名前を目にしたのは、2024 年 5 月に OpenAI が ChatGPT Edu に関する情報^[13]を公開した時だった。そこには、ChatGPT をドイツ語の授業で「語学学習の相棒 (Language Buddy)」として使用する ASU の Christiane Reves 先生の取り組みの事例が取り上げられていた^[14]。Reilley 氏らのパネル討論^[12]で示されたタイムラインによると、ChatGPT が公開された 2022 年 11 月は ASU の秋学期の終わりで、2023 年 1 月に春学期が始まってキャンパスに人が戻ってくると、教員達の LLM に対する期待と不安の波が押し寄せ、混沌としていたようだ。これらの声に耳を傾けるため、意見聴取ツアー (listening tour) を行い、様々な場所でベストプラクティスや懸念事項を収集した。その後、学部教育担当副プロボストの Anne Jones 氏が教員と職員を含むタスクフォースを立ち上げ、AI リテラシーを高めるため、基礎知識 (Knowledge)・スキル (Skill)・応用 (Application) の 3 レベルに分かれた共通教育コースを作成した。Bowen 氏はこのコースに参加した教員の多さを強調しつつ、「何のインセンティブも報酬も与えることなく、2,500 人の教職員が自発的にこのクラスに参加したんだ。教職員向けの研修 (FD) を開いたことがある人なら、30 人集まれば上出来だということを知っているだろう？ 2,500 人も人が (生成 AI の学習に) エネルギーを投資したんだよ。」と語った^[11]。

2024 年 1 月、ASU は OpenAI とのコラボレーションを開始し、2024 年 2 月に 1 回目の「AI イノベーションチャレンジ (AI Innovation Challenge)」^[15]の提案募集を開始した。この取り組みは、教育・研究・職場環境に関するテーマに基づいて、教職員および学生から

プロジェクトを募集し、採択されたプロジェクトには ChatGPT の有償ライセンスが提供されるというものだ。

前述した Reves 先生のドイツ語の授業での活用も、この取り組みで得られた成果の 1 つである。生成 AI の言語教育への応用に興味があった筆者は Bowen 氏の講演の質疑応答の時間に「生成 AI は言語教育をどのように変えるか? (How does AI change language education?)」という質問をしてみたところ、「この質問には同僚の Christiane (Reves 先生のこと) の方がずっとよい回答を持ち合わせていると思うが」と断りつつ、「AI の可能性は、常時接続可能なコーチであるところにあると考えていて、これにより、双方向性のあるやり取りや反復の回数を増やすことができ、さらにそれらに対する即時のフィードバックも可能になる。学生は、時間や方法、自分に合ったサイズのテクノロジーについて高い柔軟性を与えられた言語演習が可能となる。」と回答してくれた。

2-6. 生成 AI に関する各大学の取り組み

キャンパスワイドな生成 AI プラットフォームの導入に関するセッションは ASU 以外にも複数見られた。ASU 同様、特選セッションに選ばれたミシガン大学 (University of Michigan) の情報担当副学長兼 CIO の Ravi Pendse 氏の講演では、“U-M GPT” を含む生成 AI プラットフォーム^[16]の導入について語られた。テネシー大学ノックスビル校 (The University of Tennessee, Knoxville) の Mark Greig 氏と Alex Trowbridge 氏による講演^[17]では、テネシー大学コミュニティの誰もが生成 AI の恩恵を受けられるようなインクルーシブな生成 AI プラットフォーム “UT Verse”^[18]の紹介とデモが行われた。UT Verse には、視覚支援を目的とした背景・文字フォント・文章表示などのカスタマイズ機能が備わっており、ユーザーが自分に合った設定にすることができる。また、聴覚支援として音声入力・音声読み上げ機能も搭載されており、視覚障害や難読症を持つ人も使いやすいように工夫されている。

3. 【魅力2】仲間が見つかる

年次カンファレンスの参加者は主に「高等教育機関」で「ICT」に携わる人々である。必ずしも皆が ICT のエキスパートではないが、ICT に関心を持ち、自分の業務に活かしたいと考えている人々の集まりである。そんな人達が、対面・オンライン合わせて 8,000 人もいる。

国籍・言語・文化が異なっているにもかかわらず、日々の業務で直面する問題や関心事は似通っているため、共通の話題がたくさんある。その中には、最高に気の合う人も1人はいるといのがここで伝えたいことだ。これが2つ目の魅力、「仲間が見つかる」である。

筆者は口頭発表を聞くとき、前の方に座ることにしている。最前列が空いていれば、そこに座る。自分の前に他の聴衆がいない方がプレゼンに集中できるし、発表後の発表者も捕まえやすい。

ASUのBowen氏の講演^[11]を聞くため、いつものように会場の最前列で講演が始まるのを待っていたところ、隣に座った人に話しかけられた。その人の名前はMikhael Loo氏で、テネシー大学ノックスビル校のAIエドゥケーター(AI Educator)だ。発表前に少し話してみたところ、生成AIのプラットフォームの開発にも関わっているとのことだったので、「この講演のあとにぜひ話を聞きたい」と伝え、講演が終わった後に再び話をするようになった。講演後、Loo氏との話は弾んだ。Loo氏も筆者と同様、様々な用途で生成AIを活用していたので、お互いの使い方やノウハウを共有しつつ、生成AIの教育への応用や、生成AI自体の教育について小一時間議論し、意気投合した。仲間が見つかったのである。

帰国後、11月のオンライン年次カンファレンスでは、Loo氏の「ヒューマンAI: インタラクティブな体験を通して言語モデルから神秘性を取り除く(Human AI: Demystifying Language Models Through Interactive Experience)」という講演^[19]に参加した。このオンラインセッションには100名弱の人が参加していた。Loo氏はまず参加者を誕生日の日付がその月の前半か後半かでAチームとBチームに分けた。そして、与えられたプロンプトに続く言葉をそれぞれのチームから交互にZoomのチャットに投稿させ、提案された語のうち票が多いものを選んで文章を繋げて文を完成させた。これによりLLMの機能の一部を体験することができ、原理に触れながらLLMの神秘的な部分を削ぎ落としていくのが講演の目的であった。

Loo氏の講演の最後のスライドには、以下のようなメッセージが書かれていた。

AIムーブメントは、人を助ける新しい方法を、みんなまで探していくことだ。あなたもそのひとり。(The AI movement is about people such as yourself finding new ways to help other people.)

—マイケル・ルー (Mikhael Loo)

この言葉には、LLMが学習した先人の文章が、今の

我々を助けてくれるのと同じように、我々もLLMを通じて他の人々を助けるための情報を提供できるという意味が込められている。彼らしい前向きな言葉である。

このように、年次カンファレンスでの出会いが、新たな仲間を見つけるきっかけになることもある。Loo氏との出会いは、筆者にとって年次カンファレンスの最大の収穫の1つであった。

4.【魅力3】モチベーションが上がる

筆者は、生成AIの教育機関への活用に関する最新の情報を得るために年次カンファレンスに参加した。その目的は達成され、米国の高等教育機関の取り組みについて、多くの知見が得られた。さて、この知識を活かして、何ができるだろうか？見聞きした実践例をそのまま自分の所属大学に適用することは、予算規模や人員配置の違いから困難だが、細かいレベルでは参考になることがたくさんあった。できることから、自分でも実践してみたい。実践した上で、AXIESやEDUCAUSEでその成果を報告し、仲間と共有したい。そう思うようになっていた。これが第三の魅力、「モチベーションが上がる」である。本稿執筆時点で、実践してみた取り組みについて説明する。

4-1. 生成AIの活用を目指す教職共同チームを結成

組織全体で生成AIの活用の推進を目指そうとした時、教員が1人でできることは限られている。また、教職員が3,000人いれば、必ず新しい物好きの技術愛好家がいるという直感もあり、仲間を探すことにした。近場から探してみたところ、生成AIの業務利用について興味があるという人が見つかった。同じ部署の技術職員である田ノ上 飛翔氏、リカレント教育センター地域イノベーション学研究科チーム係長の池田 真樹氏、財務部財務管理チーム 調達室長の平山 亮氏、DX・情報チーム専門職員の江川 昂明氏の4人である。筆者も含めた5人で結成したのが教職共同チームの「生成AI活用検証イニシアティブ(Generative AI Utilization Testing Initiative; GAUTI)」である。“GAUTI”と書いて、我々は「ゴーチ」と呼んでいる。

4-2. 生成AIに関する利用実態調査の実施

GAUTIの活動を始めるにあたり、筆者のものも含めて複数のコアとなるアイデアはあったが、それらが実際に学内のニーズとどの程度マッチするのかは未知数であった。意見を聴取する機会があれば、生成AIを使いこなしている人や逆に生成AIに不安を感じている人の意見もある程度吸い上げられると考えた。そこで、

2024年11月21日～12月20日の日程で『三重大学における生成AI利用実態調査(2024)』を実施した。この調査の目的は「生成AI技術が大学内での教育・研究・業務の効率化にどのように役立っているかを把握し、今後の活用方法を検討すること」である。調査に使用した設問はGitHubリポジトリ^[20]で公開している。

謝辞

AXIESの国際連携室の梶田将司先生(名古屋大学), 山田恒夫先生(放送大学), 笠原禎也先生(金沢大学), 事務局長代行の喜多一先生(京都大学), AXIES事務局の皆様には、年次カンファレンスへの参加にあたり大変お世話になった。丁型の派遣団員として参加された中村素典先生(京都大学), 森村吉貴先生(京都大学), 島袋友里氏(京都大学), 丸山伸社長(株式会社シー・オー・コンヴ)にも派遣団の活動の各所でサポート頂いた。

UTSA訪問の際には、フランス代表団の皆さんに大変お世話になった。John Augeri博士は日本の派遣団とフランス代表団の連携をして頂いた。Thierry Koscielniak博士は近隣訪問の交渉を担当されており、またUTSAからの移動の際に筆者をレンタカーで送迎して下さった。Bruno Urbero博士, Laurent Flory氏, Frédéric Habert氏, Emmanuelle Vivier氏, Erica Dumont氏, Bertrand Mocquet氏の皆様にも、フランスの高等教育機関について、様々なことをご教授頂いた。皆様に、厚く御礼申し上げます。

2025年1月8日

参考文献

- ※ URL は全て 2025 年 1 月 8 日時点で閲覧可能であったものを示している。
- [1] Nobu C. Shirai: 『EDUCAUSE カンファレンス派遣事業の魅力』, <https://youtu.be/GvusCh86BDA> (2024 年 12 月 9 日撮影)
 - [2] EDUCAUSE: “Mission and Organization”, <https://www.educause.edu/about/mission-and-organization>
 - [3] Nobu C. Shirai: “educause-meeting-mapper”, <https://github.com/gptdialogues/educause-meeting-mapper>
 - [4] Nobu C. Shirai: 『サン・アントニオ市街の様子 2024/10/20』, <https://youtu.be/EFuWDXpLA9U> (2024 年 10 月 20 日撮影)
 - [5] Nobu C. Shirai: 『EDUCAUSE Annual Conference 2024 in San Antonio の会場の様子』, <https://youtu.be/m21P38WGD7A> (2024 年 10 月 21 日撮影)
 - [6] Nobu C. Shirai: 『EDUCAUSE 年次大会 2024 in サン・アントニオの企業展示会場の様子』, <https://youtu.be/JRpDzTHNNWU> (2024 年 10 月 22 日撮影)
 - [7] EDUCAUSE: “EDUCAUSE Annual Conference Online > Online Agenda”, <https://events.educause.edu/annual-conference/2024-online/agenda>
 - [8] Nobu C. Shirai: 『ChatGPT プログラミングのすすめ』, <https://zenn.dev/nobucshirai/articles/chatgpt-programming>
 - [9] Nobu C. Shirai: “GPTDialogues”, <https://github.com/gptdialogues>
 - [10] Nobu C. Shirai: “educause-keyword-counter”, <https://github.com/gptdialogues/educause-keyword-counter>
 - [11] Kyle Bowen: “AI and the Future of My-Sized Technology”, EDUCAUSE Annual Conference 2024, <https://events.educause.edu/annual-conference/2024/agenda/ai-and-the-future-of-my-sized-technology>
 - [12] Gemma Garcia, Allison Hall, Elizabeth Reilley, and Ayat Sweid: “Look What AI Made Us Do: Innovating and Evolving Education”, EDUCAUSE Annual Conference 2024, <https://events.educause.edu/annual-conference/2024/agenda/look-what-ai-made-us-do-innovating-and-evolving-education>
 - [13] OpenAI: 『ChatGPT Edu が登場』, <https://openai.com/ja-JP/index/introducing-chatgpt-edu/> (2024 年 5 月 30 日公開)
 - [14] Arizona State University: “Meet the next AI-powered “Language Buddy””, <https://tech.asu.edu/meet-next-ai-powered-language-buddy> (2024 年 5 月 29 日公開)
 - [15] Arizona State University: “AI Innovation Challenge at ASU call for proposals is now open”, <https://tech.asu.edu/features/2024-ai-innovation-challenge-opens> (2024 年 2 月 1 日公開)
 - [16] University of Michigan: “Custom GenAI Services for the U-M Community”, <https://genai.umich.edu/>
 - [17] Mark Greig and Alex Trowbridge: “Unlocking Inclusion: Harnessing AI for Accessibility”, EDUCAUSE Annual Conference 2024, <https://events.educause.edu/annual-conference/2024/agenda/unlocking-inclusion-harnessing-ai-for-accessibility>
 - [18] The University of Tennessee, Knoxville: “UT Verse AI

Assistant”,
<https://utverse.tennessee.edu/>

- [19] Mikhael Loo: “Human AI: Demystifying Language Models Through Interactive Experience”, EDUCAUSE Annual Conference 2024,
<https://events.educause.edu/annual-conference/2024-online/agenda/human-ai-demystifying-language-models-through-interactive-experience>
- [20] Nobu C. Shirai: “MieU_GenAI_survey_2024”,
https://github.com/nobucshirai/MieU_GenAI_survey_2024

注釈

- 1) 地図の描画プログラムは ChatGPT o1-preview モデルを用いて生成した。プロンプトとプログラムのソースコードを含む ChatGPT の出力は GitHub リポジトリ [3] で公開している。
- 2) 米国東部時間での日程。日本時間では 11 月 14, 15 日の日が変わった直後から早朝にかけての時間帯に行われた。米国へ赴くよりは楽だが、最後まで参加すると翌日の業務に支障が出る可能性が高いので、事前に前後の予定を調整しておくことをお勧めする。
- 3) ChatGPT にプログラミングさせる時のコツについて筆者がまとめた記事 [8] を公開している。
- 4) キーワードを含むセッション数の年次変化グラフの作成方法について。まず 2014 ~ 2024 年のセッション（対面およびオンライン）のタイトル・アジェンダの HTML を機械的にダウンロード（攻撃と見なされないよう、各アクセス間隔を 5 秒に設定）。タイトルもしくは要旨のテキストに指定したキーワードがないかを確認して数をカウントする。プログラムを作成するのに使用した ChatGPT とのやり取りとプログラムのソースコードは GitHub リポジトリ [10] で公開している。

【著者略歴】



白井 伸宙

2015 年 大阪大学大学院理学研究科にて博士（理学）取得，同年に三重大学総合情報処理センター 助教。2024 年に情報基盤センターへ組織名改称，現在に至る。専門：統計力

学，計算科学。大規模言語モデルの業務応用に興味がある。

YouTube: <https://www.youtube.com/@nobucshirai>